
それは素敵な休暇の過ごし方 ~ 7日目 ~

阿佐木 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは素敵な休暇の過ごし方 ～7日目～

【NZコード】

N2789BA

【作者名】

阿佐木 零

【あらすじ】

pixivにて投稿した東方project一次創作です。休暇も終わり、無事に仕事を始めた映姫。疲れて家に帰ると、そこには見慣れた光景が広がっていた。

前日までのあらすじ

休暇と一緒にいろいろ終わった。

ふつて湧いた長期休暇も無事終わり、元通りになつた自宅と一緒に氣分もリフレッシュ。

休み後の怠惰な体を引きずつて出勤してみると、想像した光景が見事に広がつていた。

「……はあ」

仕事机について最初の一聲がため息だなんて我ながら幸先の悪いスタートだ。

私がいない間、同僚の閻魔がある程度は片付けてくれていたのでその部分はいい。

ため息の原因は主にいつも問題を起こしてくれている部下の方だ。

「これも　これも、これもこれもこれも……全部小町絡みじゃないの！」

尤も、それほど大きな問題ではない。
するべき仕事に遅れただのサボつただの早退しただけの欠勤しただけの些細な事だけれど、

「塵も積もれば何とやら……せはりあの娘には一度お灸を」

とは言つても様子を見に来ててくれた事もある。

嬉しかったのは確かだし、厳しくしそぎるのも上司としてどうかと思つし……うーん。

「まあ、まずは溜まつた仕事から片付けますか」

積み上げられた書類。そのどれもが私が片付けるべき部分だ。予想外に充実した長期休暇の代償は、倍以上の仕事。いろいろあつた休暇だったけど

「代償としては少ない量かもね」

小さく笑みを零し、一度大きく伸びをしてから私は田の前の仕事にとりかかった。

「…………ただいま」

案の定というか、くたくたになつて帰宅する。

八雲家にいた時のくせか、ひとりだとこうのにただいまと言つてしまつ。

ただ家中を虚しく反響するだけだとこの間に、この短い間ですっかり癖が

「ああ、おかえり。お疲れ様」

「うん。仕事が溜まつててね。片付きそつこないから今日は は

え？」

当たり前のように迎えの声が聞こえ、つい流れで喋ってしまったけど氣付く。

意識が飛んでいてわからなかつたけど、家には明かりがつき、夕餉の良い匂いまで立ち込めている。

「一田振りだね、映姫」

そして変わらず氣取つて首を傾げているのは黄金色の九尾を持つ藍だ。

「えーっと

言いたい事は山ほどある。

でも最初に口から飛び出したのはたつた一言だった。

「何でいるの？」

「これはまた随分だね」

くくく、と小さく笑い、

「私がここにいるって事は当然誰のせいかわかるようなものだらう？」

「あ……」

そうだ。

八雲家の柱である藍がこんな時間に私の家で夕餉の準備をしてい

るはずがない。

いや、それはそれで嬉しいのだが、やつじやなくして。

あの紫と橙を放つておくはずがないのだ。

つまり藍がここにいて尚且つ食事の準備までしてこいることは、結論としてはひとつしかな。

「またぐ、昨日の今日で……アレせどいところのへ。

「そこ」の扉から繋がつているよ。

遅くなつたけど、すまないね」こんな時間に勝手に押しかけて

「いいわよ。友人を歓迎しないわけがないでしょ」うへ。

「や、そうか。うん」

僅かに顔を赤く染めたあたり、照れているのだらう。私は藍に教えられた扉を開く。

すると、田の前にはこの一週間で見慣れた光景が広がつていた。

「……まるでビックのひみつ道具ね、これじゃ」

悪態をついてこると軽い足音と共に小さな影が飛び込んでくる。受け止めると、小さな影は元気良く笑う。

「四季様、おかえりなさい！」

「ええ、ありがとう橙」

頭を撫でると「えへへ」と手を細めて橙は気持ちよさそうに笑つた。

「紫はどうしているか知ってる?」

「うん! 紫様ならいつもの部屋だよ」

「ありがとう。もうすぐご飯の準備が出来るみたいだから先に行つて」

「はーい!」

駆けていく橙を見送つて目的地へと向かう。
そして躊躇なく戸を開け放つと、予想通りといふか寝ているようだつた。
でも、

「……寝たフリはどうかと思つわよ」

「んぐっ」

ビクッと体が反応したので起きているのが丸わかりだ。

大体、八雲家と私の家がスキマを通じて繋がつてゐる時点で寝ていなのは明白だ。

寝ている状態でもスキマを操れるなら、幻想郷はとんでもない有様になつてゐるはずなのだから。

「まつたく」

「まつちに背を向けてくる紫にもわかるよ」大げさに息をつく。

そして、

「そ、」飯の用意が出来てるんだから、いつまでも寝てないで行くわよ

悪態をつくながら手を差し伸ばした。

届かない距離。

私から歩み寄つてもいいし、紫は相変わらず背を向けて寝転んでいる。

「んも。」

「ちえ、はい」

だけど紫はちゃんと答えてくれる。

面倒くさそうにして起き上がりて欠伸をして背を伸ばしてから、
「だからか取り出した扇子を片手に怪しく笑むのだ。

「いいわねえ、じつこのも」

家に戻ろう。

背を向けた私に紫が呟いた。

きっと私と紫は同じ気持ちだろう。

だけど見られると悔しいから、ふたりして隠している。

「うん、やうね」

伝えられなくちゃわからない気持ちがあつて、
何度も繰り返しても色褪せない想いがある。

当たり前を当たり前じゃないと思える事の大事を少しでも知つ

てしまつたから。

紫と一緒に賑やかな食卓へと戻る。

ひとりきりでは迎えられない暖かさがそこにあって、大切な者たちと騒ぐ大切をもちゃんとわかつたから。

だから思つのだ。

それは きっと素敵な休暇の過ごし方だったのだなつて。

了

(後書き)

この回でシリーズは完結となります。ここまでお付き合い頂いた皆様、ありがとうございました。

四季映姫とハ雲紫。原作では仲が悪いキャラクター同士ですが、こうして書いてみると私の中ではなかなかどうして良いコンビのようにも思えてきたのですから不思議なものです。

タイトルに関してはまだまだずっと続していく そんな意味も込めて『最終日』にはしませんでした。二次創作は人の数ほど物語があります。これからも皆様の紡がれる物語が毎日続していくよう願わせていただいて、今回は筆を置かせていただこうかと思います。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2789ba/>

それは素敵な休暇の過ごし方～7日目～

2012年1月7日01時48分発行